

台湾女流作家・三毛の初期作品

サンマオ

「雨季は二度と来ない」について

——作品の中の恋と当時現実の恋との関わり——

李 丹丹

キーワード：三毛 台湾文学 舒凡^{ジョボフン} モダニズムからの脱却 作品の中の恋と現実の恋

はじめに

本論は台湾の女流作家三毛の初期作品について分析を試みるものであるが、最初に三毛の経歴・創作時期区分について確認したい。

三毛、本名は陳平、1945年に四川省重慶市の弁護士の家庭で生まれ（1943年生まれという説もある）、1949年一家で台湾に移住した。幼少の頃から広くさまざまな書物を読んだ。中学校2年の時、教師に試験中カンニングしたと疑われ、インクのついた筆で目の周りに丸をつけられ廊下を一周させられた。この「カンニング」事件のショックで三毛は登校拒否に陥り、休学せざるを得なかった。その間、父・陳嗣慶が自宅で彼女に英語、唐詩などを教えた。1960年（1961年の説もある）絵画教師・顧福生のもとで勉学を始める。1962年、処女作「惑」を発表。1964年、聴講生として台北の中国文化大学へ入学、大学3年目に再び休学してスペインへ留学した。それから1970年までスペイン、ドイツ、アメリカと相継いで就学し、1970年に台湾に戻った。1973年再び台湾を離れ、当時スペイン領だったサハラ砂漠に赴く。同年、そこでスペイン人荷西と結婚。砂漠での生活は彼女に創作の才能の花を開かせるものとなった。1974年、「砂漠の中のレストラン」の掲載をきっかけに作品を次々と発表した。1979年に夫荷西が突然事故死する。1981年、再び台湾に戻り、創作活動を続ける一方、文化大学の中文科で教鞭をとった。1991年、三毛は自ら世を去り、数奇な生涯を終えた。

三毛の文学創作は作風、筆致や内容によって次のように三つの段階に分けることができる¹。

- ① 創作初期：1962年～1967年（台湾での勉学時期）
- ② 創作中期：1968年～1979年（台湾を離れてから夫である荷西事故死まで）

③ 創作後期：1980年～1991年（荷西の死後）

創作初期は七篇の作品があり、『雨季は二度とこない』（台湾皇冠出版社、1976年初版）という作品集に収めている。具体的な初出情報は次の通りである。

三毛初期作品一覧

篇名	日本語訳名	初出	初出年月日
惑	惑	『現代文学』	1962年12月
秋恋 ²	秋の恋	『中央日報』	1963年1月10日
月河	月河	『皇冠』	1963年8月
極楽鳥 ³	極楽鳥	『徵信新聞報』	1966年1月
雨季不再来	雨季は二度と来ない	『出版月刊』	1966年9月
一個星期一的早晨	ある月曜日の朝	『出版月刊』	1967年3月
安東尼・我的安東尼	アントニー・私のアントニー	『幼獅文芸』	1967年6月

表に挙げた作品の順番は『雨季は二度と来ない』の目次と同じである。初出年月日を見ると、『雨季は二度と来ない』に収録されている初期作品は掲載時期順に配置されていることが分かる。

三毛の創作初期の最初の四篇、すなわち「惑」、「秋の恋」、「月河」、「極楽鳥」は当時台湾文壇で流行していたモダニズムの影響が強くみられる（例えば処女作「惑」と四篇目の「極楽鳥」に実存主義、二篇目の「秋の恋」と三篇目の「月河」に表現主義の影響が見られる。具体的には別の機会に検討する）。五篇目の「雨季は二度と来ない」からは、モダニズムから一気に脱出した。現実と離れている最初の四篇と違い、「雨季は二度とこない」に書かれた恋は現実に密接していると筆者は考える。

1. 「雨季は二度と来ない」を執筆する前後の三毛

前節で触れたとおり、三毛は中学2年生の時（1957年）「カンニング」事件をきっかけとして不登校になり、その後7年間という長い間休学していた。家に閉じこもる日々について三毛はこう語る。

「我的天地，只是那幢日式房子、父親母親、放學歸來時的姊弟，而這些人我是絕對不主動去接觸的。

街的大門，是沒有意義的，對我，街上沒有可走的路。

小小的我，唯一的活動，便是在無人的午後繞著小院的水泥地一圈一圈的溜冰。⁴」

（「私の世界は、あの日本式の家、両親、放課後になって帰ってきた姉と弟たちだ

けだった。しかしこの人たちに私から積極的に接することはけっしてなかった。

大通りに面した門は意味がなかった、私にとっては。町には私が歩ける道などなかったから。

幼い私の唯一の活動は、誰もいない午後に、小さな庭のコンクリートの地面をローラースケートでぐるぐると滑って回ることだった」。

外の世界との繋がりを強く拒否し、家族にも心を開かなかった当時の精神状態を三毛自身は「自閉」と言う。両親は転校を勧めたが、新しい学校に登校する朝、三毛は玄関で倒れてしまう⁵。更に精神状態が最も不安定な時期には自殺未遂事件まで起こす⁶。このような三毛を両親は受け入れ、父は家庭で教師となり、国語などを教えた。(トル) 精神状態が徐々に落ち着いてからは絵の勉強を始め、モダニストの絵画教師であった顧福生を通じて(顧福生が三毛の文章を当時『現代文学』の編集長である白先勇に渡した)、1962年処女作「惑」を発表した。

1964年、三毛は文化大学の創立者である張其昀の許可を得て、聴講生として当校の哲学学科へ入学する。再びキャンパスに戻ったことは、三毛がすでに「自閉」状態から抜け出した証拠だと言える。病気はほぼ快癒した三毛は、新しい恋(三毛はかつて絵画教師・顧福生に恋愛感情を抱いていたと思われる。⁷)に陥っていく。相手は同じ大学の先輩で、作家としても活動していた舒凡である。三毛と舒凡の恋はあまりうまくいっていなかったが、男性との本当の意味での交際はこれが初めてである。新しい環境と感情の下で、心を病んだ時に受け入れたモダニズムが彼女の中で徐々に薄れていったと考えられる。また、諸般の事情により舒凡の本や彼に関する資料を十分に集めることができないが、三毛の初期後期の作品から舒凡の影響が見られる(例えば「雨季は二度と来ない」の次の作品「ある月曜日の朝」)。文学青年である舒凡の影響が、三毛の初期後期作品がモダニズムから離れた原因の一つである。

三毛は舒凡とどのような恋をしたのかを見る前に、「雨季は二度と来ない」に描いた恋を先に見てみよう。

2. 「雨季は二度と来ない」の恋

「雨季は二度と来ない」は、主人公の「私」が恋人の培と喧嘩をして培が会いに来なくなったために「私」の中で生じた感情、及び学校での幾人かの友人との付き合いを描写している小説である。

「雨季は二度と来ない」では主人公の「私」の恋する相手——培は名前と身分だけが書かれており、本当の人物としては一度も登場していない。しかし、「私」の培への思いが12箇所に亘って書かれている。そのため、「雨季は二度と来ない」はやはり恋愛小説と言っていい。とすると、「雨季は二度と来ない」はどのような恋を描いているかが重要になってくる。

① 「私」が進んで求めている恋

「雨季は二度と来ない」に主人公「私」の培への思いがよく描かれている。以下に例を挙げて見てみよう。

i、「今日鏡中的不是我，那是個滿面渴想著培的女孩。我凝望著自己，追念著培的眼睛」

（「今日鏡の中にいるのは私ではなく、培への恋しさを満面に湛えた女の子だ。私は自分を見つめながら培の目を追想していたのだった」）

ii、「我的戀念和往日他（培——筆者）給我的重大回憶，只有使得我一再激動的去懷想他」

（「彼に対する恋しさと以前の彼[培——筆者]との大切な思い出が彼への気持をたびたび昂揚させるだけだ。」）

iii、「培不在這兒，什麼都不再光彩了。」

（「培がここにいないせいで、何もかもが色彩を失っていた。」）

培と喧嘩をしたが、「私」は別れる気が全くなく、ずっと彼のことを思い、彼が会いにくるのを待っていた。しかし、培は会いに来てくれない。そのため、「私」は落ち込んで、人に忘れられたつらさを感じ（「被人遺忘的難受」）、自ら培に会いに行くかどうか、心が揺れる。

「培，你這樣不來看我，我什麼都做不出來，培，是否該我去找你呢」

（「培、あなたがこんなふうに顔も見せないんじゃ、私は何も手につかないわ。培、私から会いに行くべきなのかしら。」）

さらに、「私」は二人がまさかこれで別れてしまうのではないかと心配する。「私」はテストの解答用紙の後ろにこう書く。

「森林中的柯萊蒂，雨中的柯萊蒂，你的太陽在哪裡」

（「森の中のクリュティエ、雨の中のクリュティエ、あなたの太陽はどこにあるの。」）

このクリュティエ（Clytie。本論で使用されているテキスト《三毛全集2 雨季不再來》[皇冠文化出版有限公司、2003年3月]の注釈[68頁]はClytzeと間違えている。）はギリシア神話の中の水の妖精（同テキストの注釈[68頁]は山澤の女神と間違えている）である。Clytieは太陽神のヘリオス（Helios）を恋して、この幸せが続くものだと思っていたが、最愛のヘリオスは彼女を捨てほかのニンフと恋仲になり、二度と振り向いてくれないのであった。クリュティエは大地に座り込み、9日間飲まず食わずで、毎日空を見上げ、ヘリオスの太陽の車が空を駆けるのを見続けていた。

そのうち彼女の身体は一輪の花になる。⁸

三毛がどのようなギリシア神話に関する本を読んでいたのか、今のところ確定できていないが、ここでは主人公「私」が自分のことをクリュティエに、培をヘリオスに例えているに間違いない。神話の中ではヘリオスは毎日現れ、クリュティエは彼を見続けることができたが、小説の中では「太陽神である」培は姿が現れず、「クリュティエである」「私」は彼の姿さえ見られない。降り続けている雨は「太陽神である」培が現れないから、「クリュティエである」「私」の心の涙であろう。なお「クリュティエの変身」をモチーフとした絵画は多く存在しているが、そのいずれも「雨の中」ではない。ギリシャ神話本編では出現していない「雨」をクリュティエと結びつけたのは、三毛当人であり、こうして作者はギリシア神話のニンフの物語を用いて、主人公の「私」の培への愛、彼が会いに来ない悲しみ、そして失恋する恐れを表現している。

②「私」に雨季をもたらした恋

「雨季は二度と来ない」の中の恋はいうまでもなく気持ちよく、楽しい恋ではなく、憂鬱なものである。この恋が「私」にもたらしたのは心の雨季である。些細なことで恋人の培と喧嘩して、相手が会いに来なくなってしまった。そのため、「私」は気分が沈んで、憂えている。

i、「想到今日的考試，想到心中掛念著的培，心情就又無端的沉落下去」

（「今日の試験のことを思い出し、そして心にひっかかっていた培のことを思い出して、またなんとなく気分が沈んでいた。」）

ii、「我看著這些景象，心中無端的升起一層疲憊來，這是怎麼樣令人喪氣的一個日子啊。」

（「この風景は私に、得体の知れない疲労感をもたらした。今日はなんて、気分の沈む日なのだろう。」）

iii、「我呼吸著這不潔的空氣，覺得這是一個令人厭倦而又無奈的日子。」

（「私はこの不潔な空気を吸って、今日という日を本当に退屈でどうしようもない日だと感じていた。」）

また、「私」と同級生の李日とで次のような会話がある。

「“走就走，卡帕，有時你太認真了，你是不是認為在大雨里跑著就算被雨擊倒了，傻子。”（李日——筆者）

“我已經沒有多少尊嚴了，給我一點小小的驕傲吧。”（『私』——筆者）」

（“歩きたいなら歩こう。カパ、君にはたまに真面目すぎる時があるよ。君は大雨

の中を走ったら雨に叩き潰されたことになるだけでも思ってるんでしょう。馬鹿みたい。” [李日——筆者]

“私にはもう尊厳なんかろくに残されてないんだから、少しぐらいプライドを持たせて。” [『私』——筆者]

「私」が言った「尊厳なんかろくに残されてないんだから」という言葉は具体的に何を指しているか書かれてないが、この小説全篇で書かれている「私」の恋の話という点からすると、尊厳がろくに残ってないというのは恐らく恋のことを指していると判断できる。つまり、培と恋することで、「私」は自分の尊厳を失ってしまっている。ここからも「私」と培との恋は決して楽しいことではないと窺い知ることができる。

③ そのような恋の中での「私」の気持ち

培が会いに来ないため、「私」の気持ちは沈んでいる。しかし、気が沈んでばかりではなく、時々培が会いに来るだろうとの希望を持ったりもする。

「培不會在車站吧，他不會在那兒等我」

(「培は駅にいないだろう。彼がそこで私を待っているわけがない。」)

「培が駅にいないだろう」(「培不會在車站吧」)という言葉は、培が駅にいるかもしれないというニュアンスを秘めている。また、「私」が学校に着いた時には、次のような描写がある。

「我進門，攤開筆記，靠在椅子上發愣。今日培會來找我么？他知道我在這兒，他知道我們彼此想念著。」

(「私は教室に入り、席に着きノートを開き、椅子にもたれてぼんやりとしていた。今日培は私に会いに来るだろうか？彼は私がここにいることを知っているはずだ。彼は私たちが互いのことを恋しく思っていることを知っているはずだ。」)

このように「私」は恋人の培が会いに来ないだろうと思いながら、会いに来るかもしれないという希望を持っている。そして、培が会いに来ないため、「私」はその希望を失い、失望してしまう。

「今晨培也沒有來找我，而日復一日的等待就只有使得我更沉落下去。今晨的我就是如此的撐不住了，我生活在一種對大小事情都過分執著的謬誤中，因此我無法在其中得著慰藉和光亮了。」

(「今朝も培は会いに来なかった。何日間も待たされて、私の気分は沈む一方だった。そして今朝になっていよいよ我慢できなくなった。私は大きなことにも小さなことにも執着しすぎてしまう。こんな間違った考え方のせいで、その中から癒しも光も得ることができないでいる。」)

しかし、「私」は完全に諦めたわけではなく、まだ培が会いに来ることを望んでいる。

「我只是在拖延時間，盼望著教室門口有培的身影來接我。」

（「私はただこうして時間を潰して、私を迎えに教室の入り口に培が姿を待っているだけなのだ。」）

「私」は培が会いに来るのを望んでいたが、培は「私」が帰るまで会いに来ず、私は再び失望を感じる。

「下樓梯時我知道今日我又碰不著培了，我正在一步一步下樓，我正經過你教室的門口，培，我一點辦法都沒有」

（「階段を下りる時、今日もまた培と会えないのが分かった。私は一步一步階段を下りて行く。私はあなたの教室の入り口を過ぎて行く。培、私にはどうしようもない。」）

そして、土砂降りの雨の中でいよいよ「私」の失望は頂点に達する。

「我濕得眼睛都張不開，做了個手勢叫李日替我拿書，一面用手擦著臉，這時候我哭了，我不知道這永恆空虛的時光要何時才能過去，我就那樣一無抗拒的被卷在雨里，我漂浮在一條河上，一條沉靜的大河，我開始無助的沉浮起來，我慌張得很，口里喊著，培，快來救我，快點，我要沈下去了，培，我要浸死了。」

（「濡れたせいで目も開けられなくなり、手まねきして李日を呼び、本を持ってもらって、手で顔を拭いた。私は泣き出した。こんなどこまでも空しい日々がいつまで続くのか分からない。私は何の抵抗もできずにこの雨に巻き込まれ、私は河の中で浮かび、静かに流れる大河の中で、助けもないまま沈んだり浮かんだりし始めたようだった。非常に慌てて私は叫んだ。培、早く助けに来て、早く、沈んじゃう、培、私は溺れて死にそうなのよ。」）

前掲したようにこの大雨は本当の雨というより、失望した「私」の心の中の涙の象徴である。このように完全に希望を失った「私」は絶望するかと思いきや、ギリシヤ神話のヘリオス＝太陽神に準えられる培はきっといつかまた顔を出し、「私」に日差しを降り注いでくれるだろう、と希望を持つようになり、小説も終盤となる。

「這時候我注視著眼前的雨水，心想著，下吧，下吧，隨便你下到哪一天，你總要過去的，這種日子總有停住的一天，大地要再度絢麗光彩起來，經過了無盡的雨水之後。我再不要做一個河童了，我不會永遠這樣沉在河底的，雨季終將過去。總有一天，我要在一個充滿陽光的早晨起來，那時候我躺在床上，靜靜的聽聽窗外如洗的鳥聲，那是多麼安適而又快樂的一種甦醒。到時候我早晨起來，對著鏡子，我會再度看見陽光駐留在

我的臉上，我會一遍遍告訴自己，雨季過了，雨季將不再來，我會覺得，在那一日早晨，當我出門的時候，我會穿著那雙乾燥的黃球鞋，踏上一條充滿日光的大道，那時候，我會說，看這陽光，雨季將不再來。」

（「その時私は目の前の雨水を見つめ、思った。降って、降って。いつまで降っても、結局いつかやむのだから。こんな日々は結局過ぎ、たくさんの雨のあと大地は再びきらびやかな彩りにつつまれる。私はもう二度と河童ではいられない。いつまでもこんな河の底にいるわけにいかない。雨季は結局いつか過ぎる。必ずそんな日が来る。太陽の光に満ちた朝に目覚め、ベッドで窓の外の澄んだ鳥の声を静かに聞くだろう。それはどれほど快適で心地よい目覚めだろう。その時こそ私は朝、鏡に向かって、再び光が私の顔にとどまっているのを見ることが出来るはずだ。私は一度、もう一度自分に言い聞かせるだろう。雨季はすでに過ぎ、そしてそれは二度と来ないと。私はこのように思うだろう。雨季の過ぎた日の朝、出かける時、きれいに乾かした黄色の運動靴を履き、日の光に満ちた大通りに踏み出す。その時、私はこう言うだろう。この太陽の光を見れば雨季は二度と来ないと。）」

このように「私」の心の中では希望をもったり失ったりすることを繰り返している。「私」の気持ちは非常に憂鬱で不安定な状態にある。

3. 「雨季は二度と来ない」の恋と当時三毛の現実の中の恋との深い関わり

「雨季は二度と来ない」で描かれた恋と「私」の心情は、当時の三毛と舒凡との本当の恋と三毛の本当に気持ちに密接な関係にあると考えられる。

舒凡は本名を梁光明といい、1942年河北省に生まれ、後に両親と一緒に台湾へ移住する。その後、中国文化大学（台北）演劇学科に入学し、監督専攻で学ぶ。大学時代、数多くの作品を発表し、1966年文星書店によって初めての作品集『出走』が出版された。その後も舒凡は小説を書くことに取り組み、1969年二冊目の作品集『行過曠野』を世に問わせた。しかし、二冊の作品集を出した後、舒凡は突然筆を絶った。舒凡の作品に関する歸鴻亭の指摘によると「過去への名残り」（「懷舊情結」）というモチーフをよく登場させた傾向が窺える⁹。舒凡のこの創作傾向は前掲のように三毛に影響を与えた。

舒凡は三毛の学年一つ上の先輩である（三毛は哲学学科）。三毛と舒凡は文化大学で知り合い、二人は恋人関係になる。先行研究では三毛と舒凡の恋が2年間続いたとしている¹⁰。しかし、その恋が具体的にいつから始まったのか明らかにされていない。隠地の「作家與書的故事」¹¹では舒凡がデビュー作の『出走』を出版する際、三毛がその表紙の色の仕上がりを手伝ったと述べている。『出走』は1966年8月に出版されたため、1966年の8月前から三毛と舒凡の交際はすでに始まっていただろう。すると、「雨季は二度と来ない」は1966年9月に掲載された作品であるため、それを書いた時には三毛と舒凡が交際中であったことも分かる。

「雨季は二度と来ない」の中の培が演劇学科の学生の身分と設定され、そして「私」の同級生の李日のせりふ——「叫導演，喂，培導演」（「監督と呼ぼう。おい、培監督」）

——から培の専攻がわかる。これは当時の舒凡の所属している学科と学んでいる専攻と一致する。ここから「雨季は二度と来ない」の培はおそらく当時の三毛の恋人舒凡をモデルにしていたと推測できる。

三毛と舒凡がどのような恋をしていたかについて考察を加える。

『才女三毛』、『三毛傳』、『三毛情史』などによると、三毛と舒凡が交際するようになったきっかけは、ある日原稿料をもらった三毛が皆にご馳走している時、舒凡も来たことである（三毛が1964年に文化大学に入学してから「雨季は二度と来ない」を発表する前に発表した作品は「極楽鳥」しかないので、その原稿料は恐らく「極楽鳥」の原稿料であろう。従って、「極楽鳥」を発表する前には三毛と舒凡は付き合いがないことになる。「雨季は二度と来ない」を書く時に三毛と舒凡がすでに付き合いたとすれば、三毛と舒凡の恋が始まったのは「極楽鳥」のあとで、「雨季は二度と来ない」の前であることになる。つまり、1966年1月から9月までの間である）。『才女三毛』、『三毛情史』¹²などによると、舒凡と交際を始める以前、三毛は舒凡を暫く追いかけていたという。三毛はよく舒凡の後について、彼の行くところに行き、彼がすることと同じことをしていた。また自分の授業をさぼって、演劇学科の授業を聞きに行ったりする。要するにかなり舒凡に熱を上げていたのである。結局舒凡が彼女の誠意にほだされ、三毛と交際するようになった。このように三毛と舒凡の恋は最初から三毛が積極的に求めたものである。このような状況は交際中も続く。『永遠流浪:三毛傳』¹³には次のような叙述がある。

「三毛是熾熱的，不加約束的，她付出了全部身心去愛，哪怕整個兒焚化了也在所不惜，她渴望舒凡像想像中的戀人那樣與自己親密無間，她渴望聽到熱烈的情話，溫情的愛撫，兩個人的世界親暱無比。然而，在另一方面，舒凡一直都很冷靜，也可說是冷淡，他跟三毛在一起時，更像是知心朋友，而不像熱戀中的情人。從一開始，舒凡就是出於悲憫之情接受三毛的，兩人在一起的時候，他對三毛的感情仍沒有從憐憫轉向戀愛。（中略——筆者）在兩個人相戀過程中，舒凡一直是被動的、勉強的，也就顯得有些冷漠。」

（「三毛は情熱的で、縛られないタイプである。彼女はすべての精力を尽くして恋をしていて、その熱さで自分自身が焼け死んでも構わない覚悟をしていた。三毛は舒凡が想像通りの恋人のように自分と親密であって欲しいと望んでいて、舒凡に熱烈な愛の言葉を望み、優しく可愛がってもらいたかった。三毛が二人だけの親密な世界を望んでいたのに対して、舒凡はこの恋に対してずっと冷静で、冷淡とも言える態度だった。彼は三毛と一緒にいる時、熱烈な恋をする恋人というよりも親友のようだった。最初の時、舒凡は不憫に思ったため三毛を受け入れた。この不憫に思う気持ちは付き合い合ってから恋愛感情に変わらなかった。[中略——筆者]二人のこの恋の中で、舒凡はずっと受動的で、消極的で、関心が薄いように見えた。）

文才のおかげで当時の文化大学で既に有名人であった舒凡は、多くの女子学生にとって高嶺の花のような存在に違いない。そんな舒凡は好きだから付き合い始めたわけでもない三毛に情熱を傾けることができないでいた。このような偏った恋はうまく

行かず、三毛も常にそのつらさを感じる。また『永遠流浪:三毛傳』を引用して見てみよう。

「得不到相應的愛的回報的三毛，心中常被這種感覺折磨著，那就是舒凡不愛自己，憑直覺，她認為真正相愛不該是這樣子。這令三毛心理痛苦萬分，她無法向任何一個人傾吐自己心中的苦水，只是哭哭笑笑，神情恍惚。」¹⁴

（「自分の愛に応ずる愛を相手から得ることができないでいる三毛は、常に舒凡が自分のことを愛していないという感じに苦しめられていた。三毛は直感的に本当の恋はこのようなものではないと思っていた。このことが三毛は苦しくてたまらなかったが、誰にも自分のつらさを語ることができず、泣いたり笑ったりして、ぼんやりとしていただけであった。」）

三毛の父親・陳嗣慶は舒凡に恋している時の三毛について「那時候的她並不冷靜，她哭哭笑笑，神情恍惚」¹⁵（「その時の三毛は冷静ではなかった。彼女は泣いたり笑ったりしてぼんやりとしていた」と語る。後、三毛が大学の学業を終えずにスペインへ渡ったこともこの恋愛から逃げるためだったという。

「其實，我（三毛——筆者）並不想出國，但是為了逼他（舒凡——筆者），我真的一步步在辦理出國手續。」¹⁶

（「實際のところ、私は海外に行こうとは考えなかった。でも彼に（結婚への）承知をさせるために、私は本当に少しずつ留学する手続きをした」）

父陳嗣慶も三毛の留学の理由についてこう語る。

「我的二女兒，大學才念到三年級上學期，就要遠走他鄉。她堅持遠走，原因還是那位男朋友。三毛把人家死纏爛打苦愛，雙方都很受折磨，她放棄的原因是：不能纏死對方，而如果再住台灣，情難自禁，還是走吧。」¹⁷

（「私の次女三毛はまだ大学三年前期の学生であったのに、遠く離れたところに行こうとした。彼女はどうしても行こうとした理由は、やはりあの恋人にある。三毛は彼を深く愛したため、彼にしがみついてもばかりいた結果、二人とも大変傷ついた。彼女があきらめた理由は、これ以上彼が死ぬまでまとわりつくわけにはいかない、でもこのまま台湾に住み続けているなら、自分の思いを抑えられない、やはり離れるしかない、ということのようであった。」）

こうして舒凡との偏った恋愛は三毛に「恋愛の春」をもたらしたというより「恋愛の雨季」をもたらすことになった。そのような恋をしていた三毛は、希望を持ったり失ったりを繰り返す不安定な情緒の中にいたに違いない。

三毛の舒凡との現実の恋と「雨季は二度と来ない」の「私」と培の恋とを照らし合

わせてみると、非常に似たようなイメージを得ることができる。したがって、「雨季は二度とこない」は当時の三毛の恋を映していると言える。一方、三毛はそのような恋をしているからこそ、「雨季は二度と来ない」を書き上げたともいえる。また前掲のように「雨季は二度と来ない」の末尾に「私」は自分がいつか「日の光に満ちた大通りに踏み出す」と信じると書かれている。恋人の「培」と一緒に「出発」するのではなく、自分一人で「踏み出す」ことは実際二人が別れることをほのめかしているかのようだが、ギリシャ神話におけるクリュティエの比喩の中で培が太陽神に例えられていることから考えると、当時三毛は平凡との恋愛に自信と希望を持っていたと推察できる。これはまさに「雨季は二度とこない」であろう。

注

¹ 先行研究のほとんどは三毛の出国、夫である荷西の死によって創作時期を分けている。しかし、張弘「試論三毛作品的藝術風格及其成因」（『佳木斯教育學院學報』、1994年第1号）以外は具体的に区切る年を書いていない。張弘は勉学時期（1961～1974）、台湾を離れた時期（1974～1981）、荷西の死後（1981～1991）とはっきり分けている。筆者も三毛の出国、夫の死によって創作時期を分けているが、具体的な年は張弘と違う。理由は三毛の初めての出国は1967年であり、荷西の死は1979年であることである。

² 「秋の恋」の原題は「異郷の恋」（「異郷之戀」）である。

³ 「極楽鳥」の掲載誌について。筆者が所有しているテキストの「極楽鳥」原文末尾に記されている初出掲載紙は、『人間』の文芸版となっている。しかし、同テキストの末尾付録に載せてある桂文亞氏出「飛——三毛作品今昔」では「極楽鳥」の初出掲載紙を『徵信新聞報』としている。現在「極楽鳥」の初出掲載紙を手に入れることができないため、いずれの情報が正しいかは不明であるが、筆者は桂文亞の主張の方が信憑性が高いと考える。桂氏は児童文学家で、三毛の研究者であり、また桂氏はプライベートで三毛と友人として付き合いがあり、三毛のことをよく知っている人である。そのような桂氏が「極楽鳥」の初出であると主張している『徵信新聞報』について台湾の国家図書館ホームページで調べてみると、次のような情報が得られる。

『徵信新聞報』は1950年徵信新聞社によって創刊され、1968年に『中國時報』へと改名された日刊新聞である。

この情報に基づいて考えると「極楽鳥」がこの新聞に掲載されることは物理的に十分可能性がある。一方、『人間』について同じ方法で調べるとこの名前の新聞が見つからず、1985年に創刊された月刊雑誌の『人間』だけが存在している。この月刊雑誌の創刊時期からして「極楽鳥」の掲載誌になることは時系列的に無理である。以上から、筆者は「極楽鳥」の初出が『人間』の文芸版より、『徵信新聞報』であるとする説が信憑性が高いと考える。

⁴ 三毛「顧みて」（「蓦然回首」）（『馬をプレゼント』[『送你一匹馬』]、廣東旅遊出版社、1996年、14頁、台灣皇冠出版社、1983年初版）。

⁵ 陳愛璞、張瑞徳『三毛傳奇』（広東人民出版社、2000年、34頁）。

⁶ 同上、37頁。

⁷ この点については拙作「台湾女流作家三毛研究——そのモダニズムの影響を受けた背景について——」を参照

⁸ Michael Grant Publications Ltd and John Hazel 編 Gods and mortals in classical mythology （Great Britain、1973年、206頁）参照

⁹ 歸鴻亭「評舒凡的『獵鴨記』」（『青溪』、1975年6月号）。

¹⁰ 『才女三毛』（時代文藝出版社、2003年）60頁参照。

¹¹ 『新書月刊』、1983年12月号。

¹² 陳琳『三毛情史』（時代文藝出版社、1997年）。

¹³ 劉克敵、梁君梅著、江蘇文藝出版社、2001年、79～80頁参照。

¹⁴ 同上80頁。

¹⁵ 陳嗣慶「我家老二——三小姐」（三毛著『学校での出来事』[『鬧學記』]の序の一、廣東旅遊出版社、1996年、台灣皇冠出版社によって1988初版）。

¹⁶ 三毛「私の初恋」（「我的初戀」）による（師永剛、陳文芬、馮昭、沙林著『三毛私家相冊』、中信出版社、2005年、58頁）。

¹⁷ 同注15。

（信州大学 全学教育機構 非常勤講師）

2016年1月5日受理 2016年2月8日採録決定